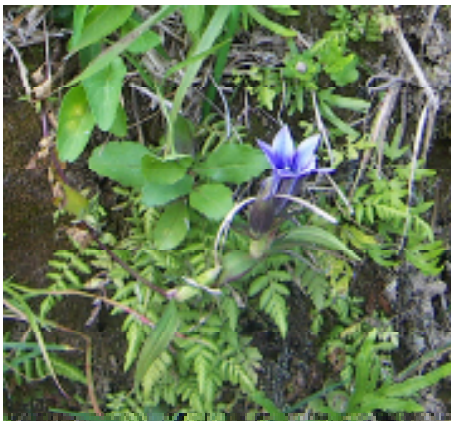


## 『市花「リンドウ」に想う』

川西市緑化協会理事  
西 良祐



市花のリンドウは、リンドウ科リンドウ属の植物で、仲間は全世界に分布しているそうです。歳時記では仲秋の花とされ秋を代表する植物の一つとなっていますが、生活の場では薬用植物として古くから重宝されてきました。現在も薬用植物関係の書物に「リンドウは本邦各地の山野に自生しており、根をリュウタン、龍胆、Japanese gentian」「世界で最もよく使われる重要な苦味健胃薬」「漢方では消化器の充血、炎症、尿道炎、リウマチなどに抗炎症薬的に用いられる」などの記述が見られます。花の魅力だけでなくこうした薬効を、源氏の知恵者が見逃す筈はなく、いざ鎌倉にそなえて武備の矢竹などと共に大切にされ「源氏の花」となったのでは、などと愚考している次第です。漢字の龍胆（竜胆）は、根の味が胆汁のように苦味が強く、それも最上級ということから龍の字があてられたとのこと。「良薬口にいがし」といわれますが、その代表的な植物の一つであるセンブリもリンドウの仲間、有難いことに市内に自生しており、恩恵にあずかった方も少なからずいらっしゃることでしょう。



ところが日々の生活の中では、不思議なほどリンドウという植物そのものに出会う機会が少ないように思います。植物にも人と馴れ親しむことの容易なもの、そうでないものがあり、この花もその一つかも知れません。しかし植物を育てていて感ずるのは、植物を自分の子供ではなく、余所で育てていた生命だ、という意識が必要だということではないでしょうか。秋の野辺で野草の中でたくましく生きている姿から、どこでも元気に育ってくれるであろうというのはこちらの思いで、リンドウにすれば野辺こそ住いで、いい加減な植

木鉢の中の生活は迷惑至極なのかも知れません。

根源的な話として、植物は動物よりも環境適応能力は優れているのではないのでしょうか。一例をあげますと、動物は短時間に移動できますが、植物は地面に根をおろしているので、環境変化に耐えて生き延べなければなりません。そうしたリンドウの思いを、理解している人達ということになると、先ず思い浮かぶのは山野草愛好家でしょう。幸いにも、川西市にはすばらしいリンドウの愛好家が何人もおられますし、そうした方々のご協力も頂けるようになり、肝心な自生地保全を地元の御協力を頂いて実現されているとのこと。何よりです。

『相手の身になって物事を考えよ!!』という言葉があります。環境問題が地球規模で意識されていますが、根源的な解決は植物抜きにはありません。リンドウという「わがまちの生命」を慈しむ川西市の姿勢を誇りに思いますし、その広がり

### 略歴

西 良祐 (にしりょうすけ)

学歴 鳥取大学卒業

職歴 大阪府立園芸高等学校教諭、

甲子園短期大学教授

常磐会学園大学教授、

(社団法人) フラワーソサイエティー会長

著書 『草花』、『花を贈る事典』など

その他 NHKテレビ「趣味の園芸」講師など